

「すべては光からはじまる」

2021年12月

中学宗教主事 川俣 茂

あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。

わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。

(テサロニケの信徒への手紙— 5章5節)

クリスマスを迎えるこの時期、街には「光」があふれています。都会の喧騒と光の渦に囲まれた世界が広がっています。クリスマス・ツリーに光をともしたり、ろうそくに火をともしたりします。このように光があふれているのは、ただ単に光がきれいだから、美しいからというのではなく、クリスマスにおいては「光」というものがとても大切な意味をもっているからこそ、「光」をとますのです。

* * *

と同時に、クリスマスの出来事、つまり主イエスの誕生は、人間の歴史の現実の中、いわば「闇」といつてもいい状況下で起こった出来事であると聖書は記しています。

* * *

現代では、夜でもネオンが光り輝き、闇などは少なくなったと感じられるかもしれません。しかし、街の明るさ、華やかさや物の豊かさとは対照的に人の心の中はすさんでいて、なお闇の中にいるといつてもいいでしょう。特にコロナ禍にある現代社会では、闇の中で希望を持たず、不安を抱きながらも自分を省みず、自分は悪くないと主張し、周囲に責任をなすりつける。自分でもどうしたらよいのかわからず、「希望の光」を見出せないで、悩み、苦しみ、この世をさまよってしまう、そのような現実、いや「闇」の部分が多くあるのもまた事実でしょう。

* * *

ヘロデという歴史上の人物が君臨していた時代、救い主の誕生、いや「ユダヤ人の王の誕生」を聞いた人々は不安を抱きました。博士たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と言って、エルサレムの街を情報収集に駆けずり回っている。そのことがヘロデ自身を、そしてエルサレムの住民を不安にさせた。自らの地位を脅かす存在に対するヘロデの不安、「ただでさえ面倒な為政者がまた出現するかもしれない」ことに対する住民たちの不安。共に先の見えない、闇に陥ってしまったような状況でした。そこでヘロデは祭司長や律法学者を一人残らず集めて調べさせ、占星術の学者たちに探しに行かせ、その場所を知らせようと命じました。表面的には「わたしも行って拝もう」と、神を畏れ敬う人間であるかのように見せかけてです。しかし実際のところは自分にとって邪魔な存在であれば権力を、そして武力を行使してまでも排除するつもりでした。いや、ヘロデは実際にベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにしまいました。これがヘロデだけではなく、人間社会の現実です。人間の歴史はこの繰り返しだったといつてもよいでしょう。

* * *

そのような「闇」の中でのクリスマスの出来事。闇の中に「光」が現われました。クリスマスの「光」は消えてなくなることのない光です。その「光」とは何か。それは主イエス・キリストです。イエス・キリストの光は世の闇を一掃してしまうような大きな大きな光としては描かれていません。むしろ、闇にかき消されてしまうような、世の中の喧騒の中に埋もれてしまうような小さな小さな光として現われました。しかし、実はこの光からすべてが始まっていただけではなく、私たちもその光に照らされ、守られているのです。

SEIKYO GAKUEN